



須賀神社、修理後の第一殿

# 地宝のひびき

—和歌山県内文化財調査報告会 2025—報告資料集



金屋土居跡 石垣（北東から）

【連動企画】

「和歌山県内文化財調査成果展 紀州のあゆみ 2025」

開催中

令和7年10月11日（土）～11月16日（日）

主催 公益財団法人 和歌山県文化財センター (<http://www.wabunse.or.jp/>)  
協力 御坊市歴史民俗資料館  
後援 和歌山県教育委員会、和歌山市、海南市教育委員会、御坊市教育委員会、新宮市教育委員会、かつらぎ町教育委員会、有田川町教育委員会、日高川町教育委員会、みなべ町教育委員会、白浜町教育委員会、那智勝浦町教育委員会、公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団（順不同）

地宝のひびき 和歌山県内文化財調査報告会2025 報告資料集

2025年11月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

- 「大芝遺跡の調査成果～明らかになる縄文時代の集落と中世の墓～」
- 「八反田遺跡の発掘調査—熊野灘に臨む弥生集落—」
- 「宮井用水とその原像～津秦遺跡第19次調査の成果～」
- 「畠山氏一門の居館 金屋土居跡の発掘調査成果」
- 「須賀神社本殿の保存修理～工事の概要と社殿の特長～」
- 「名勝和歌の浦 東照宮境内 石垣及び石階段の保存修理工事  
／東照宮で見つかった石垣内側の謎の石積み」

「地宝のひびき—和歌山県内文化財調査報告会 2025—報告資料集

発行日 令和7（2025）年11月8日  
発行 公益財団法人 和歌山県文化財センター  
〒640-8301 和歌山市岩橋 1263 番地の1  
TEL 073-472-3710 FAX 073-474-2270  
E-mail maizou-1@wabunse.or.jp  
ホームページ <http://www.wabunse.or.jp/>

印刷 株式会社 協和



公益財団法人 和歌山県文化財センター

令和7年11月8日（土）

主催：公益財団法人 和歌山県文化財センター

会場：御坊市歴史民俗資料館



## 開催にあたって

『地宝のひびき—和歌山県内文化財調査報告会 2025—』は、文化財に対して共通の理解と知識を育んでいただき、県内の発掘調査の成果等を県内の文化財担当者が報告し、その成果をいち早く県民の皆様にご提供することを目的として企画しました。県教育委員会や県内各市町村の文化財担当者と連携し、第1回目を平成18年度に開催して以来、今年で20回目の節目を迎えることができました。

今回は、6件の報告と2件の誌上報告が各文化財担当者から行われます。県内では本誌に掲載できなかったものの、毎年多くの発掘調査や建造物保存修理が実施されており、それぞれが地域の歴史を知る貴重な手がかりとなっています。本報告会を通して、少しでも文化財を身近なものと感じ、また文化財の保存や活用についても考えをめぐらせていただく機会にさせていただけたらと考えています。

最後になりましたが、この報告会を開催するにあたり、ご協力を頂きました多くの機関、関係者の皆様に深く感謝の意を表す次第です。

令和7年11月8日

公益財団法人 和歌山県文化財センター 理事長 櫻井敏雄

## 地宝のひびき —和歌山県内文化財調査報告会 2025— 開催日程・目次

**開催日時** 令和7年11月8日(土) 13時00分～16時50分

**会場** 御坊市歴史民俗資料館 (御坊市塩屋町南塩屋1123番地(御坊総合運動公園内))

**報告内容** (12時30分 受付開始 13時00分 開会挨拶)

13時10分 報告1「大芝遺跡の調査成果～明らかになる縄文時代の集落と中世の墓～」……………2  
(公財) 和歌山県文化財センター 濱崎 範子

13時45分 報告2「八反田遺跡の発掘調査—熊野難に臨む弥生集落—」……………5  
新宮市教育委員会 小林 高太 氏

14時20分 報告3「宮井用水とその原像～津秦遺跡第19次調査の成果～」……………8  
(公財) 元興寺文化財研究所 村田 裕介 氏

(14時55分 10分休憩)

15時05分 報告4「畠山氏一門の居館 金屋土居跡の発掘調査成果」……………11  
有田川町教育委員会 川口 修実 氏

15時40分 報告5「須賀神社本殿の保存修理—工事の概要と社殿の特長—」……………14  
(公財) 和歌山県文化財センター 下津 健太郎

16時15分 報告6「名勝和歌の浦 東照宮境内 石垣及び石階段の保存修理工事／東照宮で見つかった石垣内側の謎の石積み」……………17  
(公財) 和歌山県文化財センター 多井 忠嗣・仲原 知之

(16時50分 閉会挨拶)

**誌上報告** 「新規発見の竪穴式石室—岡田八幡神社古墳群3号墳の発掘調査—」……………20  
海南市教育委員会 矢倉 嘉人氏・鈴木 周 氏  
「那智山における発掘調査成果について—県指定史跡中世行幸啓御泊所跡確認調査を中心に—」……………22  
(公財) 和歌山県文化財センター 石丸 彩

1. 本書は公益財団法人 和歌山県文化財センターが開催した『地宝のひびき—和歌山県内文化財調査報告会 2025—』の報告資料集である。
2. 本書掲載資料の中には、正式な報告書が平行されていないものが含まれているため、今後各資料の位置付けが変更される可能性がある。
3. 本報告会を開催するにあたり、御坊市教育委員会及び御坊市歴史民俗資料館をはじめ、県内各自治体の文化財関係部局・担当課等から多大なるご協力を得た。記して謝意を表す次第である。
4. 本書の編集は、濱崎範子(公益財団法人 和歌山県文化財センター)が担当した。

## 大芝遺跡の調査成果

～明らかになる縄文時代の集落と中世の墓～

(公財) 和歌山県文化財センター 濱崎 範子

### 1. はじめに

大芝遺跡は日高郡日高川町(旧中津村)佐井に所在する縄文時代の散布地として知られる遺跡である。県下第2位の面積を誇る日高平野に流れ込む日高川の中流域に位置し、大きく蛇行を繰り返す地点の日高川右岸の河岸段丘の一部が埋蔵文化財包蔵地となっている。遺跡は南北約320m、東西約160mの範囲に広がっており、本調査地は遺跡の北半部、中央からやや東部にあたる。今回の発掘調査は県営中山間総合整備事業佐井地区ほ場整備事業に伴うものであり、調査面積は最終的に13,284.1㎡となった。



図1 大芝遺跡位置図

### 2. 調査成果

発掘調査は作業の工程上、調査区1～4に分けて実施した。事前の試掘確認調査の成果から、当初は中世の遺構検出が予想されたが、調査の途中で一部の調査区では中世の遺構面の下に縄文時代の遺物を含む包含層及び遺構面が遺存することが明らかとなった。

調査では、現況の水田耕作土、旧耕作土以下から大きくは古代末から鎌倉・室町時代と考えられる遺物が出土する遺構が掘り込まれた中世の遺構面と、縄文時代後期の土器・石器が出土する遺構が掘り込まれた縄文時代の遺構面の2面が存在することが明らかとなった。また、確認した遺構は総数2,000を超えるが、主なものとして中世の遺構は調査区1～4全域で土坑・溝・掘立柱建物跡・小穴を、縄文時代の遺構は土坑・竪穴建物跡・小穴があり、縄文時代の遺構は主に調査区2のほぼ全域と調査区2に隣接する調査区4の南半部において集中して検出した。

### 3. 第1遺構面(古代末～中世)の遺構・遺物

第1遺構面で検出した主な遺構としては掘立柱建物跡・溝・土壇墓群がある。

掘立柱建物1(写真1)は調査区4で検出した全長6.8m、幅5.0mの建物跡である。柱穴の間隔は約1.0～2.5mの小規模な総柱建物跡とみられ、中世の土師器の破片が少量出土している。土壇墓群は約19基確認した遺構群で、平面は0.5～0.8mの円形や楕円形で深さは0.2～0.6mである。遺構の上部には0.1～0.5m程度の扁平な川原石などを置く、もしくは積み上げており、これらの川原石の多くは土坑の中心に向かってやや落ち込んでいる様相であるものが多い。現在のところ人骨などは確認していないが、遺構の形状や川原石の出土状況などを踏まえて土壇墓であると判断した(写真2)。その他、全長60mを超える溝なども確認しており、集落や墓域などを区画する溝であった可能性が高い。

古代末から中世の遺構から出土する遺物は少ないが、土師器・黒色土器・瓦器・鉄製品・繊維製品などがある。土器の内容や形状から平安時代末から室町時代初頭のものが多い。大芝遺跡が所在する日高川町中津周囲を記録した当該時期の文献史料は極めて少ないが、土壙墓 381 からは鉄製短刀（写真 3）がほぼ完形で出土している。大芝遺跡周辺の古代末から中世前半までの地域の歴史を明らかにする上で、土壙墓群の被葬者像を検討することが重要になるだろう。



写真 1 掘立柱建物跡（北から）



写真 2 土壙墓 381 石出土状況（北から）



写真 3 土壙墓 381 から出土した鉄製短刀

#### 4. 第 2 遺構面（縄文時代）の遺構・遺物

調査区 2 及び 4 の一部では中世の遺構面の下に縄文時代の遺物を含む遺構が掘り込まれていることが明らかとなった。第 2 遺構面で確認した主な遺構は、土坑・竪穴建物跡・小穴等があり、特に調査区 2 では複数の竪穴建物跡が隣接する日高川に沿って南北方向に密集して建てられた痕跡が明らかとなった（写真 4）。現状では 19 棟の竪穴建物跡を確認しており、これは県内の縄文時代の集落から見つかった竪穴建物跡の数としては最多である。また、複数の建物跡がそれぞれ重なり合いながら確認されたことから、大芝遺跡で生活していた人々が極めて限られた範囲に何度も竪穴建物を建てていたことが明らかになった。また、竪穴建物跡の内部には炉跡とみられる被熱した痕跡の残る土坑が残るものや建物を支える柱穴が多数確認されている。

出土した遺物は縄文時代後期前葉末から中葉頃のものと考えられ、地元で製作されたと見られる縄文土器（写真 5）のほか、東海地方（岐阜県北部）で出土するもの（写真 6）や関東地方の影響を強く受けた土器も確認されている。また、石器は狩猟で使用する石鏃が大多数を占めるが、石錐、削器、石錘、叩き石や石皿など多種多様な石器を確認している。また、蛇紋岩製磨製石斧（写真 7）が 1 点出土しており、形状から北陸地方で製作されたものの可能性が高い。大芝遺跡で出土した石鏃をはじめとする打製石器は、全体の 90% 以上がサヌカイトと呼ばれる石材から作られており、この石材は県内ではほとんど産出しない。また、確認したサヌカイトも目視で確認できる特徴が異なるものがあり、複数の産地から持ち込まれた可能性が非常に高いことが明らかとなってきた。



写真4 調査区2 縄文時代の竪穴建物群（東から）



写真5 縄文土器（在地産）



写真6 縄文土器  
（岐阜県北部産）

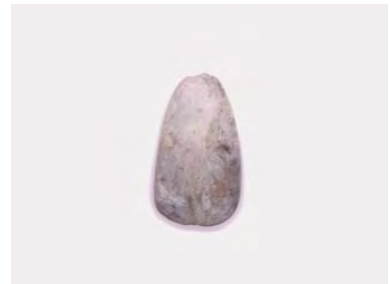


写真7 蛇紋岩製磨製石斧

## 5. まとめ

今回の大芝遺跡の発掘調査によって日高川中流域の古代末から中世及び縄文時代の様相の一端が明らかとなった。中世前半と推定される土壌墓群は、日高郡における中世の様相を知る手がかりになり得る。

また、日高川流域の縄文遺跡はこれまで河口付近や海浜部の遺跡でその痕跡を確認していたが、大芝遺跡の発掘成果から複数の竪穴建物跡というはっきりとした集落の痕跡が確認されたため、今後は日高川中流域から上流域にかけての縄文時代の遺跡にも改めて注目する必要があるだろう。出土した遺物から大芝遺跡で生活していた人々が、和歌山県内だけではなく、北陸地方や東海地方、瀬戸内海といった様々な地域の人々と交流を持っていたことも明らかになりつつあり、和歌山県の縄文時代を考える上でも非常に大きな成果を得られたと言える。

# 八反田遺跡の発掘調査

## －熊野灘に臨む弥生集落－

新宮市教育委員会 小林 高太

### 1. はじめに

八反田遺跡は、新宮市佐野・木ノ川に所在する遺跡で、太平洋に面して形成された海岸砂丘から後背湿地にかけて立地する。

平成3年（1991）に実施された遺跡東端を流れる佐野川の改修工事に伴う発掘調査では、弥生時代後期末の竪穴建物3基、土坑、ピット、自然流路やその肩部で検出された不明遺構などが確認されている。出土した弥生土器には、在地産のほか伊勢湾沿岸や近江、紀北、河内（生駒西麓）からの搬入品などがあり、各地域から多種多様な土器が運び込まれている。



図1 八反田遺跡と調査地の位置

### 2. 調査成果

今回の調査原因は、市道比奈久保線交差点改良工事に伴うもので、道路の拡幅部分 361 m<sup>2</sup> の調査を行った。調査地は、遺跡の北部、後背湿地の西端にあたり、西側に広がる山地から延びた丘陵の山麓部にあたる。調査では、遺構面が3面確認されている。

#### (1) 第1遺構面

第1遺構面は、中央部で竪穴建物1基や多数のピットなどを検出した。また、調査区全体に南北方向と東西方向の複数の溝が確認され、溝に沿って杭列が確認されている。

竪穴建物 197 は、一辺 5.0mの平面形が隅丸方形の建物で、周壁溝が平行に2条回り、外側に拡張するかたちで、1回の建て替えが行われている。4本柱の建物で、建て替え前後の各4基の柱穴を確認している。厚さ 10 cmほど堆積した遺構埋土から多くの土器が出土しており、建物として利用しなくなってから竪穴に多くの土器、石器などを捨てた廃棄遺構になったと考えられる。出土した石杵には、朱（水銀朱）が付着したものがある。

#### (2) 第2遺構面

調査区中央部から南部寄りでも部分的に整地された生活面を検出した。調査区中央部で竪穴建物1基を検出している。竪穴建物 199 は、調査区西側で検出したが、遺構西側半分が調査区外で未検出である。一辺 3.1mの平面形が方形の建物と考えられる。

また炭化物を多く含む長さが4m以上の楕円形の大型土坑を検出しているが、性格は不明である。直径 15～30 cmのピットも多く検出しており、掘立柱建物の柱穴となる可能性がある。

#### (3) 第3遺構面

第3遺構面は、調査区の南側と北側に自然の落込みを検出しており、この2つの落込みから弥生時代中期末から古墳時代初頭の土器が多量に出土している。

落込み 400 は、第 3 遺構面の調査区南側で検出したが、第 1 遺構面から第 3 遺構面にかけて存在した可能性もある。弥生時代中期から後期の弥生土器、古墳時代初頭の土師器が多く出土している。貝田町式土器などの伊勢湾西岸、S字甕などの東海系といった搬入土器を含む。

落込み 565 は、第 3 遺構面において調査区北側で検出した。弥生時代中期から弥生時代後期の弥生土器、古墳時代初頭の土師器が多く出土している。伊勢湾西岸、東海系、河内系の加飾壺(櫛描の簾状文・直線文・波状文)の搬入土器を含む。

### 3. まとめ

今回の調査では、3つの遺構面を検出し、方形の竪穴建物やピット、土坑などを確認した。竪穴建物のうち1基は、廃絶後に弥生時代後期末から古墳時代初頭の土器廃棄場となっており、集落が引き続き存続したと考えられる。

調査区全体で南北方向、東西方向の複数の溝が確認されているが、溝に沿って丸太を割って杭を打設した杭列が見られた。溝は住居地の区画としての役割を持つと考えられ、杭列はその溝肩部の土留めであった可能性がある。集落として、生活に適した環境整備がなされたと考えられる。

出土する土器には、和歌山県南部の特徴を持つ土器のほかに、伊勢湾西岸、東海系、河内系などのものが見られ、各地から土器が搬入されている。遺跡は、太平洋(熊野灘)に臨む位置にあることから、東日本と西日本を結ぶ交流ルートの上にあたり、交流状況の一端を窺い知ることができる。

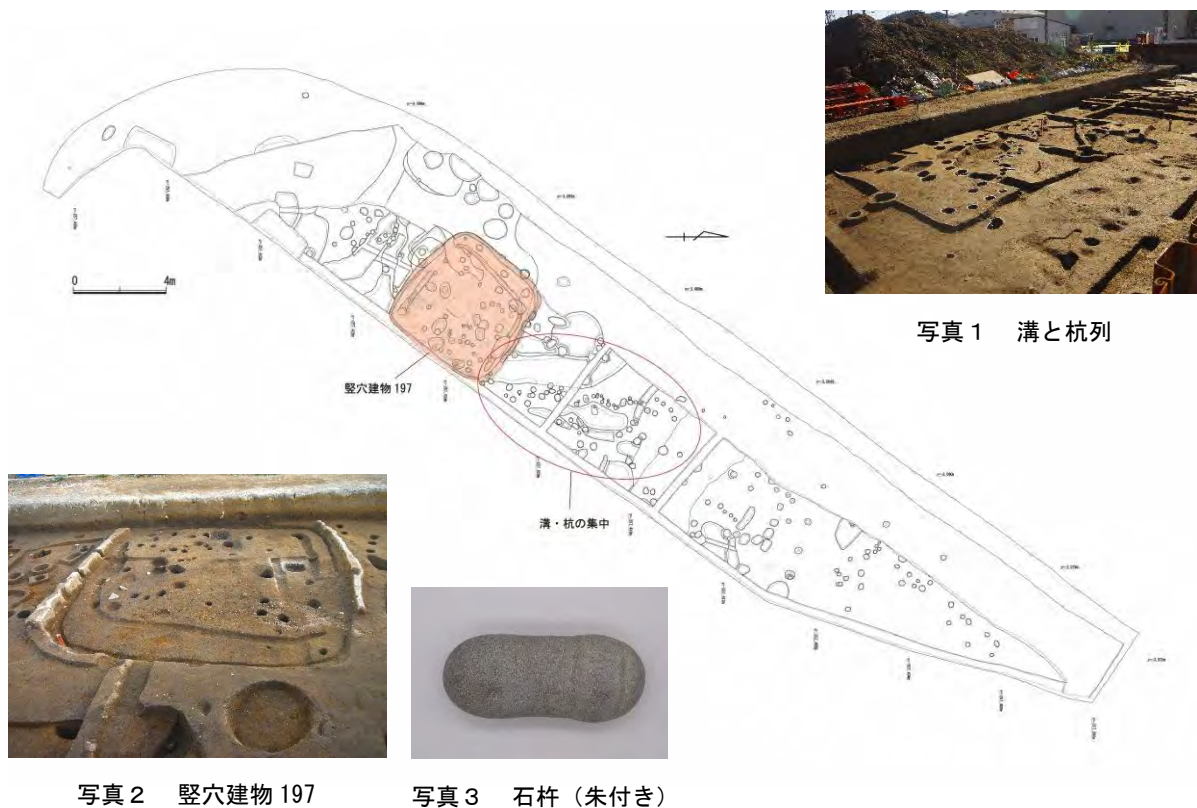


図 2 第 1 遺構面平面図

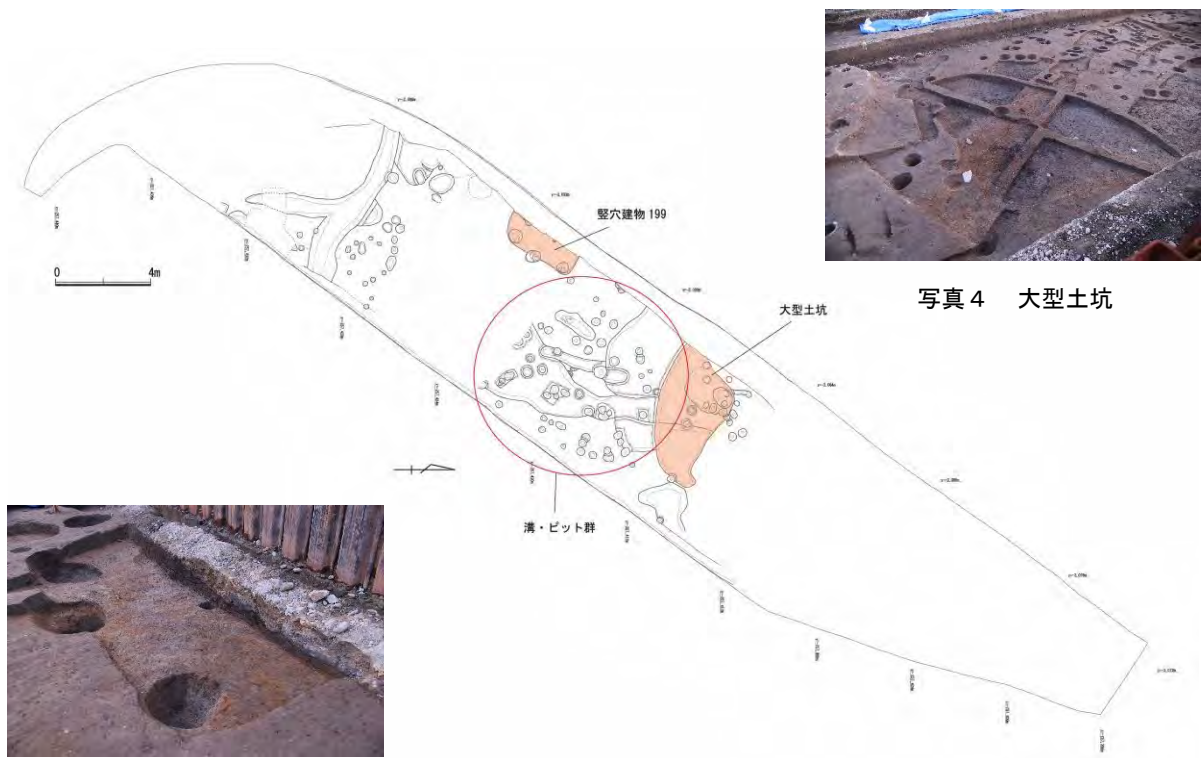


写真4 大型土坑

写真5 堅穴建物 199

図3 第2遺構面平面図

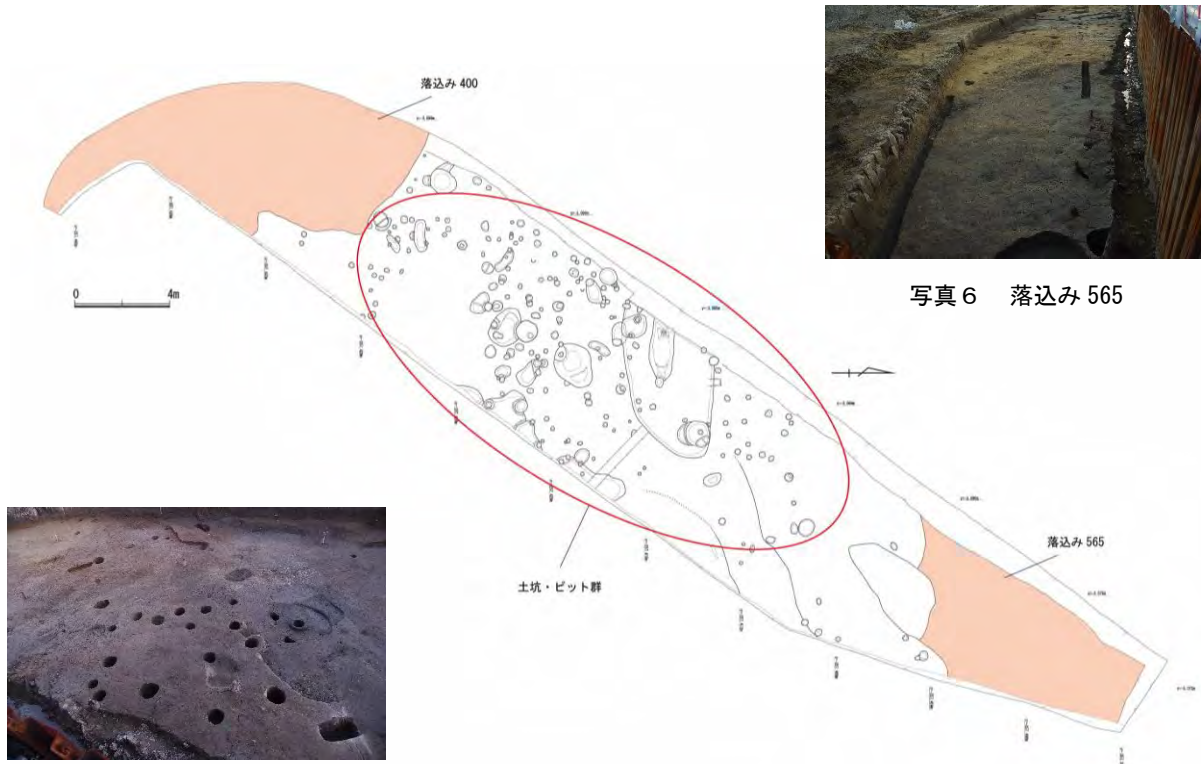


写真6 落としみ 565

写真7 ピット群

図4 第3遺構面平面図

## 宮井用水とその原像 ～津秦遺跡第 19 次調査の成果～

(公財) 元興寺文化財研究所 村田 裕介

### 1. はじめに

津秦遺跡は、紀伊国一の宮である日前宮の南側一帯に広がり、中世には日前宮の社領となっていた時期もある。今回行った津秦遺跡第 19 次調査の調査地点は日前宮の南端から約 500m 南に位置しており、日前宮との関わりも予想される地域である。

これまでに行われた津秦遺跡の発掘調査では、北東から南西へ向けて延びる古墳時代の溝や、中世の遺構などが確認されており、この地で人々の生活が連綿と続いていたことがうかがえる。

遺跡の北には紀ノ川から分水された宮井用水が現在も流れており、その支流は第 19 次調査地点のすぐそばにも存在している。文献資料やこれまでの発掘調査からは中世には現在の形に近い宮井用水が成立していたものと考えられる。



図 1 津秦遺跡第 19 次調査位置図

### 2. 調査成果

第 19 次調査は、令和 6 年 2 月から 7 月にかけて行われ、調査面積は 1400 m<sup>2</sup> である。調査区は全体を 3 区画に分け、東から 1～3 区とした。

1 区では既往の調査と同様の北東から南西へ流れる溝を複数条確認している。出土遺物から、弥生時代後期から奈良時代にかけて位置を変えながら継続的に溝が設置されていることが明らか

となった。この様相は2区東半まで続く。1区のほぼ全域で確認された020-SDは、古墳時代中期から後期にかけて機能していたものと考えられ、溝埋土からは多量の遺物が出土している。その中には埴輪も含まれており注目される。

2区西半から3区にかけては調査地点の北側から続く自然地形の微高地となる。この微高地上では井戸や建物の柱穴などが確認されており、微高地縁辺部の利用方法を示している。微高地上では弥生時代から奈良時代にかけての溝は確認されず、ここに溝が築かれるのは中世以降になってからである。

3区西端で確認された中世の大溝である110-SDは、幅約4.2m、深さ0.9mの規模で、高まり部分を開削したものである。溝内部からは瓦器碗や土師器皿などが出土したが、特筆すべきは多量の土錘である。大小2種類があり、400点以上が出土している土錘は、この地で生活した人々が水辺での漁労に従事していたことを示すものであり、当時の周辺環境を示唆するものでもある。

### 3. おわりに

本調査では、弥生時代から続く人々の生活の歴史を明らかとした。特に灌漑用水と考えられる溝は、当初は自然地形に応じたと考えられる北東から南西へ方向をとるものであったが、中世には現在の宮井用水に通じるようなものへと変化していったことがうかがえ、その際には地形的な制約も克服していったことがわかる。この背景には、条里水田や日前宮神宮領に関わる整備が想定できる。中世の溝から出土した多量の土錘からは、これに関わる漁労行為が日前宮に対する奉納を想起することも出来る。

奈良時代以前の居住域の様相については明らかとはならなかったが、北側の微高地上がその候補となる。ここは現在の集落に重なる地域であり、長く居住に適した地とみなされていたと想像することが出来る。

本調査では、周辺の環境の検討も含め、現在につながる景観の原像を垣間見ることのできる調査成果を得ることが出来た。

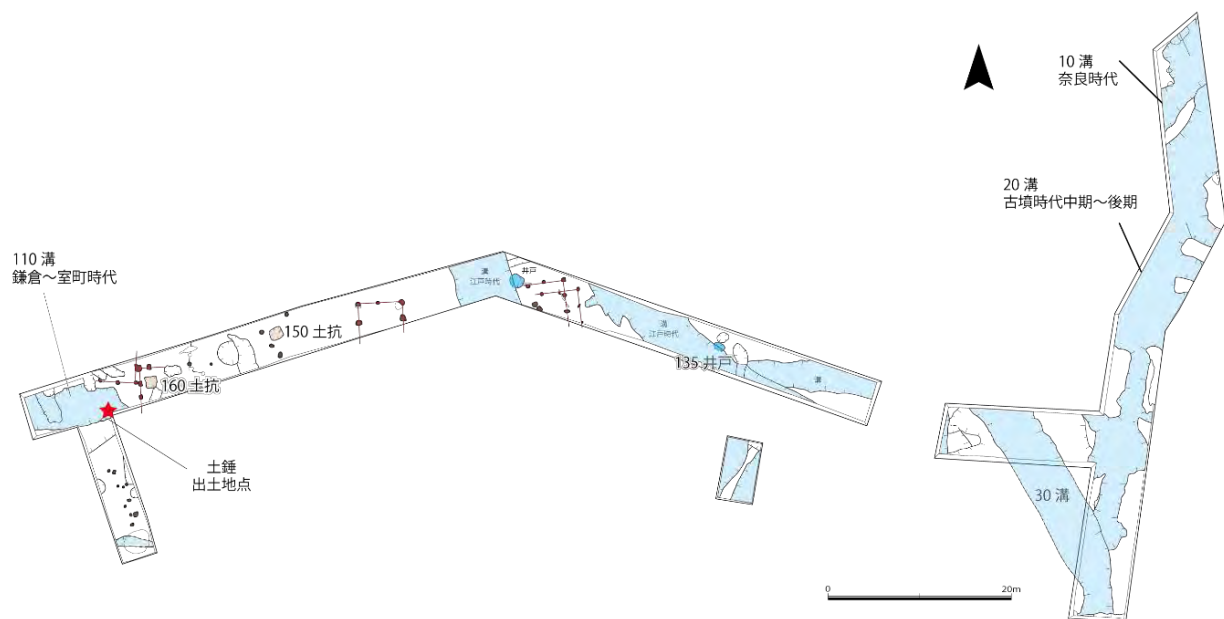


図2 遺構配置図



写真1 1区 全景 (南から)



写真2 1区 全景 (北部) (南から)



写真3 1区 全景 (西部) (西から)



写真4 2-1区 全景 (東から)



写真5 3区 全景 (西半) (南東から)



写真6 3区 全景 (中央) (南西から)



写真7 135-SE 出土状況 (南から)



写真8 160-SK 出土状況 (東から)

## 畠山氏一門の居館 金屋土居跡の発掘調査成果

有田川町教育委員会 川口 修実

### 1. はじめに

金屋土居跡は、有田川町金屋小字土井の鳥屋城小学校周辺に所在し、有田川に面した河岸段丘上に広がる遺跡である。室町時代の紀伊国守護の支配拠点であった鳥屋城跡（和歌山県指定史跡）と対をなす中世の平地城館跡であり、畠山氏に関連する居館跡と考えられてきた。また、金屋土居跡の南側にある有田川町歓喜寺は、湯浅一族出身の高僧明恵の生誕地であり、金屋土居跡の周辺には明恵の修行地やその活動を支えた地頭湯浅宗光の居館跡など湯浅党関連の遺跡が存在する。

今回の発掘調査は、有田川町役場が計画した認定こども園建設に伴って実施したものであり、令和6年度に731㎡の調査を実施した。

### 2. 遺跡の概要

金屋土居跡は、早月谷川が有田川に合流する地点にあり、西側と南側は両河川によって防御された天然の要害となっている。居館は有田川に面した位置に構えられていることから、有田川を介した流通や交通の支配にも関わったものと想定される。遺跡の北側は現在も東側から西側に向かって水路が流れている（写真2）。この水路に沿った一部の畑地は周囲より低くなっており、かつて居館の周囲を巡っていた幅10m以上の外堀の痕跡と推定できる。また、遺跡の東側には幅15m、高さ1.5m程の土手状の高まりが残り、その形状か

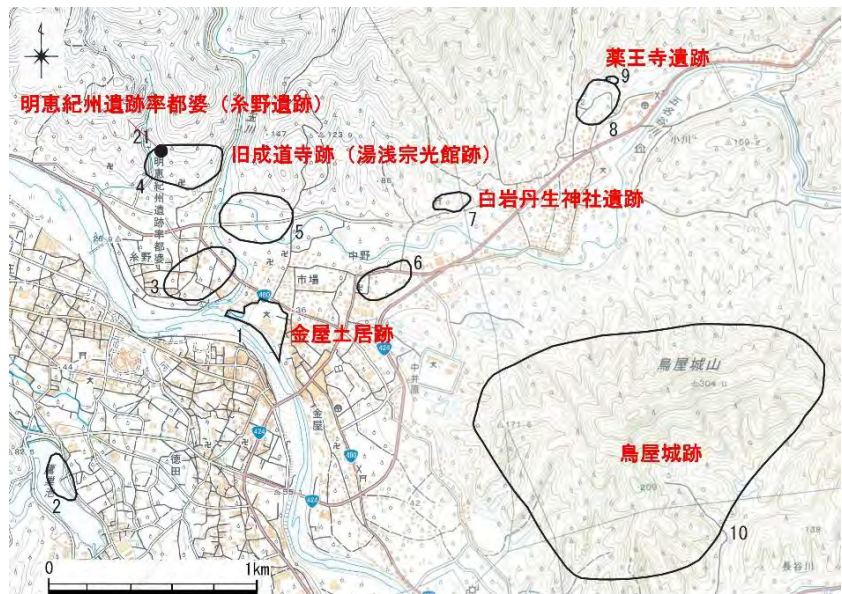


図1 金屋土居跡の位置と周辺の遺跡



写真1 金屋土居跡（北から）



写真2 居館の周囲をめぐる外堀の痕跡（東から）



写真3 遺構検出

ら土塁の可能性が考えられる。金屋土居跡は、周囲を堀や土塁で囲まれた構造が復元され、およそ東西 160m、南北 110mの範囲と推定される。

### 3. 発掘調査の成果

調査で検出した遺構は、鎌倉時代と室町時代から戦国時代のものに二分できる。鎌倉時代の遺構は、調査区西部において3棟の掘立柱建物を検出した。当該期の遺物は調査区東部においても一定量出土する状況から判断すれば、本来は調査区全域に展開していた可能性が高い。最も規模の大きな掘立柱建物1は、桁行5間(11.4m)、梁行1間(2.2m)の規模があり、柱の並びから長屋のような構造と判断される。この建物の柱穴からは、残存状況の良好な瓦器椀が出土しており、柱を抜き取った後に埋納されたものと考えられる。

室町時代の遺構としては、南北方向の堀(堀1)とそれに直交する東西方向の堀(堀2)があり、その間は掘り残されて幅3.6mの土橋となっている。堀1は、その位置関係から北側は外堀と接続していた可能性が高い。上面の幅は4.0~5.0mで、検出面からの深さは1.0~1.2mを測り、堆積状況から空堀であったと判断される。堆積土の中層は多



写真4 柱穴から出土した瓦器椀(北から)



写真5 堀1(北から)

量の礫で埋没しており、城館廃絶時に人為的に埋め戻されたと考えられる。堀2は幅3.0m以上の規模があり、下層の青灰色粘土層の堆積から一定の滞水環境にあったものと考えられる。土橋に近い西端部では3点の木材(マツ)が出土したが、堀底に据えられた扁平な河原石の上に水平を意識して置かれており、堀底が貯木場として利用されていたことを示している。この他、調査区西端部において破片点数にして900点という多量の土師器皿を廃棄した土坑(土坑1)を検出した。土師器皿は、在地のものと京都系を模倣したのものがあり、これらは武家儀礼に使用されていた可能性がある。

戦国時代の遺構は、16世紀後半頃に堀2を埋め立てて、土塀を備える門や石垣が構築される改修が加えられていた。石垣は、堀2の埋め立てと併行して構築された東西方向に南面する石垣であり、延長9.7mを検出した。石積みは、河原石をほぼ垂直ぎみに乱雑に積み上げており、最も良好な部分で7段分、高さ80cmが遺存していた。また、堀2の北側に沿って、幅1.4m、延長10.2mの範囲にわたり、比較的小振りな河原石が敷き詰められていた。周辺部からはやや盛り上がりしており、土塀の基礎と判断された。さらに、土塀の西端から東へ6mの地点には、やや大ぶりの河原石を南北方向に並べた3列の石列が検出された(石列1~3)。その方向は、石垣西面の石列と同一であり、この石列の間は土塀が開いた通路部であったと考えられ、門状の施設が構築されていた可能性が高いと考えられる。



写真6 堀2(西から)



写真7 石垣・土塀(北東から)



写真8 石垣(北東から)

#### 4. まとめ

金屋土居跡は、室町時代の居館跡と考えられてきたが、今回の初となる本格的な発掘調査によって鎌倉時代に遡る遺跡であることが判明した。鎌倉時代の建物は、地頭湯浅宗光の居館とも近い位置関係から、湯浅党の拠点に関わる施設と判断される。南北朝時代を境に湯浅党が衰退した後には、紀伊国守護となった畠山氏がその拠点を継承し、大規模に居館化したものと考えられる。居館化された時期は、堀跡から出土している遺物から判断して14世紀末から15世紀初頭頃と判断でき、1399年に畠山基国が紀伊国守護に就任した後ほどなくして居館化され、畠山氏一門(石垣家)の支配拠点となったと推定される。堀2を埋め立てて、石垣や土塀を構築した16世紀後半頃の改修は、平地城館における土造りから石造りへの変遷を示す貴重な成果であると考えられる。

## 須賀神社本殿の保存修理

### － 工事の概要と社殿の特長 －

(公財) 和歌山県文化財センター 下津 健太郎

#### 1 神社の歴史と建物について

みなべ町(旧・南部川村)西本庄にある須賀神社は、平安時代、一条天皇の御代に京都・八坂神社から祇園の宮を勧請し、南部荘の総鎮守としたのを創建と伝える古社である。神社には六百年以上前からの棟札等の記録が残され、室町時代以降当地を治めた領主たちが神社の維持管理に関わって来たことがわかる。

須賀神社の本殿は、境内北西の一段高くされた場所に、同規模・同形式の社殿3棟が横並びに建ち、東から第一殿、第二殿、第三殿として、各殿には素戔嗚尊スサノオノミコト、櫛稲田姫命クシナダヒメノミコト、八柱御子神ヤハシラノミコガミを主祭神として祀る。建物形式は「一間社・隅木入り春日造・檜皮葺」で、紀南地方における江戸時代中頃の本殿建築の特色をよく伝える建物として、昭和43年(1968)6月27日付けで和歌山県の文化財に指定されている。今回の修理中に第一殿の小屋内において新たに確認された「享保四年」の墨書紀年や、神社で保管されている各殿の再建時棟札から、享保4年(1719)に第一殿、翌5年に第二殿、翌6年に第三殿、と順番に建て替えられたことがうかがえ、三百年前の再建であることも再確認された。細部意匠や塗装の配色等においても、近隣地域に残る江戸時代の建造物と共通点を有している。



写真1 須賀神社本殿全景(右より第一殿・第二殿・第三殿の順。第一殿の前に拝殿、右に戎神社が建ち並ぶ)



写真2 修理前の本殿(南西から、手前が第三殿)



写真3 修理後の本殿(同、棟廻りは黒色で整備)

## 2 保存修理事業の概要と工事の経過

今回の保存修理事業は、令和3年度からの2か年計画で、和歌山県とみなべ町からの補助金を受けて、県指定文化財の社殿3棟の屋根葺き替え・塗装修理を中心とした維持修理工事と、神域内の防火設備工事を行った。本事業において当センターは、この保存修理工事において設計監理等の技術指導業務を担当した。

直近の保存修理事業である昭和62年(1987)には、屋根葺き替え修理が行われている。今回の修理工事前には、前回修理から34年が経過した屋根面で檜皮の摩耗が進み、もうじき雨漏りしそうな箇所も確認され始めていた(写真4)。通常、檜皮葺きの屋根は25~35年の周期(環境や仕様の差異による)で葺き直していくのが目安とされ、須賀神社もまさにその時期を迎えていた。また、塗装・彩色など現在見られる本殿の外観は、神社に残る記録によって明治39年(1906)の施工と判る。指定を受けた昭和43年頃に彩色や飾り金具の補修が実施されてから半世紀以上が経過しており、塗膜の色褪せ・変色に加えて浮き・剥がれ等が目立つ状態となっていた(写真5)。



写真4 修理前の屋根面劣化状況(檜皮を打ち留める竹釘が大きく露見する迄に摩耗が進んでいた)



写真5 彩色面の劣化状況(第二殿、木肌が見えた箇所も存在。頭貫端部の彫刻は、左が獅子、右が龍)

今回の修理では、檜皮屋根は破損・劣化箇所の更新(新材で積み替え・葺き直し)を行って、塗装・彩色面は明治後期に塗り替え・描き直しされた現状のすがたを尊重しながら補修した。具体的には、縁廻りを中心に劣化が進行していた単色塗装面では塗り替えを行い、彩色面は経年で褪色・変色した塗膜を剥落止め作業にて保持しつつ、既に剥落していた(塗膜が無くなっていた)箇所には残存部に合わせた古色にて塗膜を補う「補彩」作業を行った(写真6、7)。一方、昭和戦前期に銅板包みとなった棟廻りの修理では、修理中の調査成果を反映させた計画変更を行って、大正期以前の外観(黒色塗装仕上げ)に近付けて整えた(写真3)。

令和3年度は、第一殿と第二殿で、2殿を覆う素屋根を建設し、その内側で軒・小屋組等の木部補修、檜皮屋根の軒付補修と屋根面檜皮の葺き替え、彩色部の剥落止め・補彩、単色塗装の塗り直し等を行った。令和4年度は、2殿に飾り金具を復旧した後、素屋根を解体し、続いて第三殿の施工に移行した。第三殿の修理後には、神域の周囲に本殿3棟を炎感知式で警備し、本殿前方の拝殿は煙感知式で警備する、自動火災報知設備の設置を行って、事業を完了した。

その他、保存修理工事中には、部分的な解体作業に合わせて、建物の実測や過去の修理経過等も確認・記録しながら、建物が内包する情報を整理した。各殿の基本図面はCAD等で調整し、確認できた内容は社殿の構法・仕様等の特長として整理した。以下に、その一部を紹介する。



写真6 修理中の第二殿(彩色部の剥落止め施工後)



写真7 修理後の第二殿(彩色部補彩、単色塗り後)

### 3 調査成果の紹介

須賀神社の本殿は、屋根は檜皮葺きで、塗装・彩色・彫刻・金具で飾られた優美な外観を示している。各殿の基本図面をCADで調整した他、基準寸法の計画性を考察した(図1)。

社殿の構法・仕様等の特長については、神社記録で判る明治39年の修理内容を基軸として、それ以前となる近世期の再建以降の様相や近代以降の修理経過を整理・検証していった。

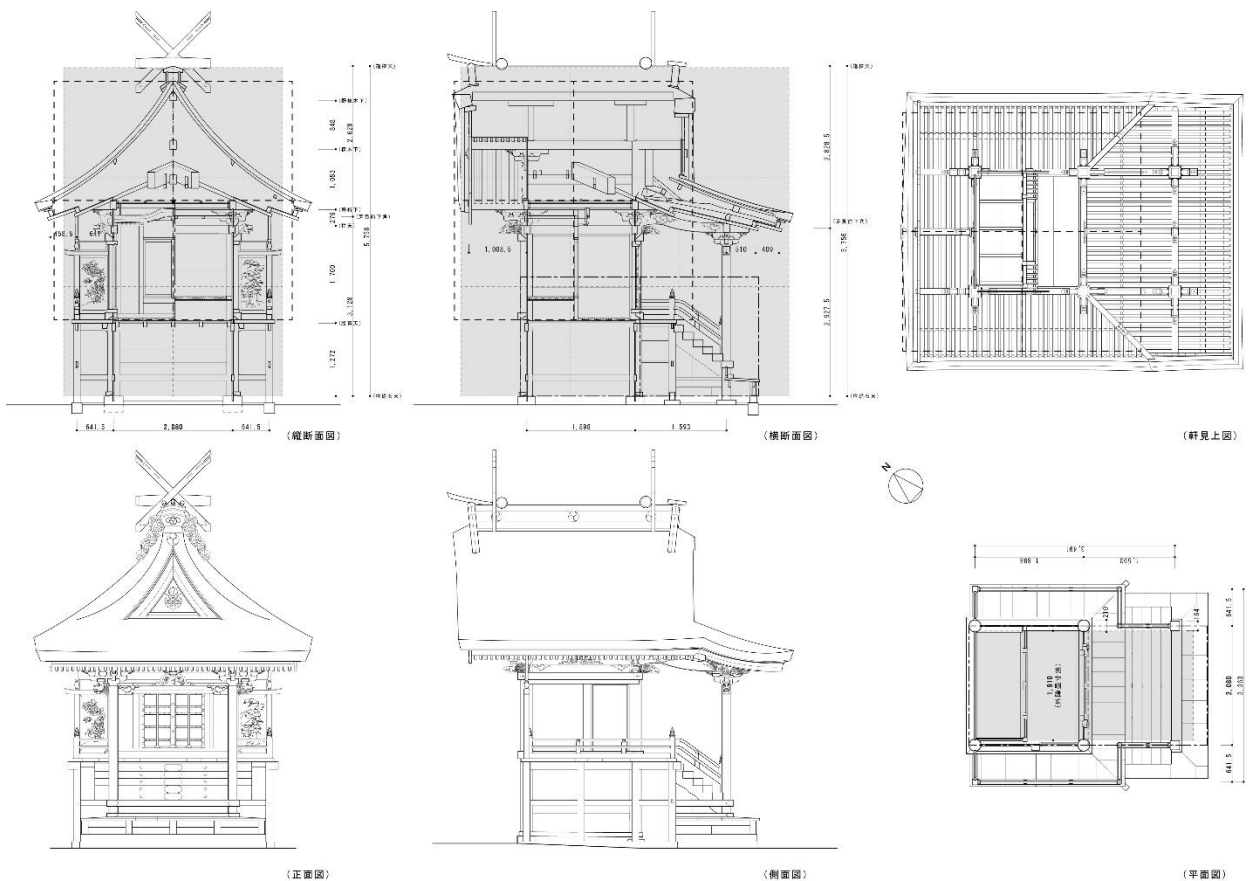


図1 須賀神社本殿(第一殿)での基本図面作成と基幹寸法等計画性の検討状況  
 → 図中の網掛は畳の長手寸法を一边とした正方形グリッドを、破線2種は身舎正面の柱間真々寸法を一边とした正方形グリッドを表現したもの。  
 → 本殿の大きさは、平面(畳4枚分)、正面(畳12枚分)、側面(畳18枚分)と畳の寸法を基準として設定されたことがうかがえる。

## 名勝和歌の浦 東照宮境内

### 石垣及び石階段の保存修理工事／東照宮で見つかった石垣内側の謎の石積み

(公財) 和歌山県文化財センター 多井 忠嗣・仲原 知之

#### 1 和歌の浦と東照宮

紀州東照宮は、江戸幕府を開いた徳川家康を東照大権現として祀る東照社として、家康の第十子である初代紀州藩主徳川頼宣により、元和7年（1621）に万葉の時代から景勝地として知られる和歌浦湾に南面する権現山中腹に築かれた。また東照宮の南東、和歌浦湾に浮かぶ妹背山に石橋である三断橋を架け、頼宣の生母である養珠院を弔う多宝塔を建てするなど、和歌の浦の景観を整備した。東照宮では創建当初の本殿・石の間・拝殿、唐門、東西瑞垣が大正5年（1916）に、楼門、東西廻廊が昭和40年（1965）に重要文化財に指定されている。また、境内地は平成26年（2014）に名勝に指定され、その歴史的景観が文化財として保護されている。

#### 2 東照宮の石工事の特徴

建立当初の石灯籠も並ぶ矩折れの参道の先に、背の高い松に覆われ、山上の楼閣のように聳える楼門へと登る108段の石階段が配されている。西隣の天満神社では緑泥片岩が野面積みされた石垣と石階段が印象的であるが、東照宮では砂岩切石が整然と積み上げられ、側面も切り込み接ぎの技法で幾何学的に積み上げられている。石階段両脇の石灯籠が片岩が隆起した岩盤に据えられていることから、この石階段は権現山の岩盤を削り出した上に砂岩の切石を敷き並べる壮大な土木工事で築かれており、当時紀州藩が如何に高度な技術を駆使して整備したかが判る。

境内に入ると、一段高く築かれた神域の石垣も切り込み接ぎとなっており、唐門の足元や、東照宮建築の特徴でもある拝殿と本殿の間に配された石の間の土間とも共通の仕様となっている。

#### 3 石垣と石階段の破損

令和5年11月、神域の石垣のうち、唐門や瑞垣を支える南面の石垣から東に連続する部分の中程で、数石の石材が崩落した。東面に矩折れした石垣も含め、周辺の石垣が大きく孕み出し、不安定な状況となっていることが確認された。また石垣の東側に隣接する石階段も不陸が進み、通行に支障が出るような状況となっていたことから、名勝を構成する要素として国庫補助を受け、令和6年、令和7年の2か年度の事業として修復することになった。

#### 4 石垣と石階段の破損原因と修理

破損した石垣や石階段を分解したところ、破損した石垣内側で樹木の根が成長し、石材を押し出したり、押し上げたことが破損の原因であることが判明した。また、石垣の内側には基壇や礎石などの古材を用いた石積み（5に詳述）が仕込まれ、石垣内部の土圧を受けている納まりとなっていた。一方で現状の石垣はその石積みの手前に厚さ20cmほどの薄い石材が化粧として積まれており、木の根で動いた石積みに押し出され、不安定な状態となっていることが判明した。

石積みが施された経緯は今回の修理に伴う調査でも不明であったことから、原則現状のまま存置することとなった。積み直しに先立ち、石垣に影響を及ぼす可能性のある周辺樹木の伐採と抜



写真1 石垣の破損状況



写真2 石垣の修理完成状況



写真3 石垣の修理状況

根を行い、今後の破損の原因を取り除いた上で、修理が必要な範囲の石垣の積み直しを行った。

石垣の積み直しは従来の技法に倣ったが、場所によって背部石積みがずれ出した部分もあることから、十分な納まりを確保することが困難であると判断した部分には、見え隠れに空練のモルタルを仕込むなど、安定した状態を保つことが出来るよう配慮して施工した。このため、モルタルが付着するなど石材に影響が及ばないように、背部石積みの全面や上面を不織布で保護

した上で、高さや通りが適正になるように各石の納まりや角度を見極め、石垣の化粧石を分解前と同じ配列で積み直した。



写真4 石階段の破損状況



写真5 石階段の修理完成状況

石階段は樹木の根の影響のほか、地盤面の沈下も確認出来たため、階段として安全に利用出来ることにも配慮して、各段の高さや段差が一定となるように積み直した。 (多井 忠嗣)

## 5 石垣解体修理に伴う発掘調査

国指定名勝及び県指定史跡「和歌の浦」の一部である東照宮本殿の唐門・瑞垣を載せる石垣から東側に連続する石垣の一部が崩落したため、石垣解体修理が計画され、解体前及び解体中の発掘調査・立会調査が必要となった。そこで、公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団が和歌山市の依頼を受けて発掘調査を実施することとなり、その発掘調査の一部を公益財団法人和歌山

県文化財センターが支援した。発掘調査は、石垣解体前に石垣上面部分において幅2mの範囲で実施した。また、石垣1段目解体後にも石垣上面部分において調査を実施した。さらに、石垣2・3段目解体時に石垣正面の精査（立会調査）を実施した。

石垣上面部分の発掘調査では、表土掘削後に黄褐色土の盛土が全面に確認でき、石垣構築時には石垣内側の上面は盛土であったことがわかった。また、石垣は奥行が短く裏込めがないことが確認でき、石垣構築状況から大正時代の整備時に積まれたものである可能性が高いと判断された。

その後、石垣1段目解体後に2段目上面の高さまで掘り下げたところ、石垣の内側に切石を中心とした石材で積まれた謎の石積みが発見された。この石積みは、正面からみれば石垣状、上面からみれば敷石状に積み重ねられており、他に類例がないもので、当初は前身の古い石垣の可能性を考えていた。しかし、石材の大きさも統一感がなく、切石以外にも小さい割石で構築される部分もあること、また、石垣南東部分では正面～側面の石垣に合わせた形で内側に石が積み重ねられていることなどから、古い前身の石垣ではなく、正面の石垣と一体として石垣内側に構築されたものであると推察できるようになった。ただし、加工された切石を使用していることから、石垣構築時に東照宮の敷地にあった切石を石垣の内部構造材として再利用した可能性が考えられる。



写真6 石垣3段目解体後 正面（南東から）



写真7 石垣1段目解体後 上面



写真8 石垣3段目解体後 正面

調査範囲の西端部分の本殿を囲う瑞

垣沿いは、切石ではなく丸石が多く認められ、黄褐色の盛土でなく黒褐色土の締まりのない土層が見られ、瑞垣に係る施工時の埋土（掘方）である可能性がある。

本殿東側の当該地には『紀伊國名所圖會』に近代までに解体された三重塔及び前面の階段が描かれており、謎の石積みの下には三重塔に続く階段が埋まっているかもしれない。

出土遺物は、表土及び根攪乱掘削時には近世以降の瓦が多量に出土したが、黄褐色の盛土からは少数の瓦片が含まれるのみである。盛土からは時期が判明する土器・陶磁器類は出土していない。出土した瓦は三重塔に関わるものである可能性がある。（仲原 知之）

## 新規発見の竪穴式石室 — 岡田八幡神社古墳群3号墳の発掘調査 —

海南市教育委員会 矢倉 嘉人・鈴木 周

### 1. はじめに

岡田八幡神社古墳群は、海南市北部を流れる亀ノ川によって形成された沖積平野中央部の標高約30mの独立丘陵に位置し、丘陵西端には、遺跡名である岡田八幡神社が鎮座している。岡田八幡神社古墳群の周辺には、縄文時代から中世にわたる遺構・遺物が確認されている岡村遺跡が広がっている。

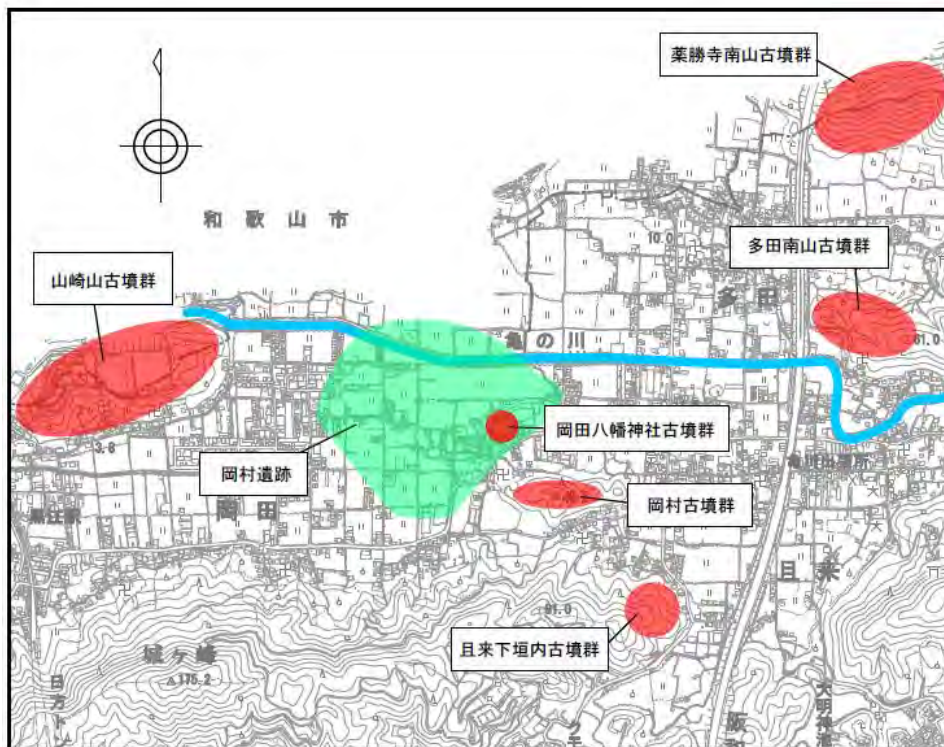


図1 岡田八幡神社古墳群位置図

岡田八幡神社古墳群では、これまで4基の古墳が確認されているが、発掘調査は実施されておらず、その詳細は明らかでなかった。そこで、今後の保存のために必要な情報を得るため、令和元年度から継続的に発掘調査をおこなっている。

### 2. 調査成果

3号墳は丘陵頂部から南側に延びる尾根上に位置し、令和4年度～令和6年度に調査を実施した。調査の結果、主軸を北西から南東にとり、緑泥片岩を用いた竪穴式石室を確認した。石室南側では方形の石を用いた側壁基石と3石の石積みを確認できたが、北側は石が雑然と集中しており、石積みといえる状況ではなかった。また、石室内空間も非常に狭く、東西の小口の石材も原位置を保つものはなかった。このような検出状況から、墳丘全体が南側の斜面下方へ大きく地滑

りをしているものと考えられる。石室規模は石材の多くが原位置を保っていないが、長さ約 3.7m、幅約 0.9mと推定される。遺物は石室東側から鉄製直刀1本、提瓶が1点、西側から、甗1点、短頸壺1点が出土した。また、墳丘北側において墳丘を画すると考えられる幅約 0.4mの溝を検出しており、墳丘規模約 6 mに復元できる。

### 3. まとめ

今回の調査では、岡田八幡神社古墳群において始めて主体部を確認することができた。検出した石室は墳丘の地滑りにより大きく崩落していたが、出土遺物から5世紀末から6世紀初頭と考えられる。付近の同時期の古墳として、5世紀末から6世紀初頭の山崎山 15号墳、6世紀中頃の山崎山 11号墳などがあり、今後、当地域での古墳の展開を考える上でも、貴重な成果となった。

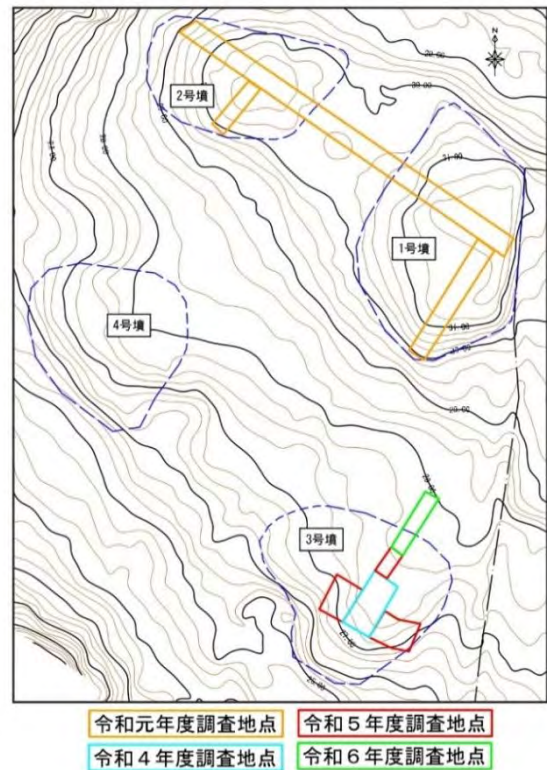


図2 調査位置図

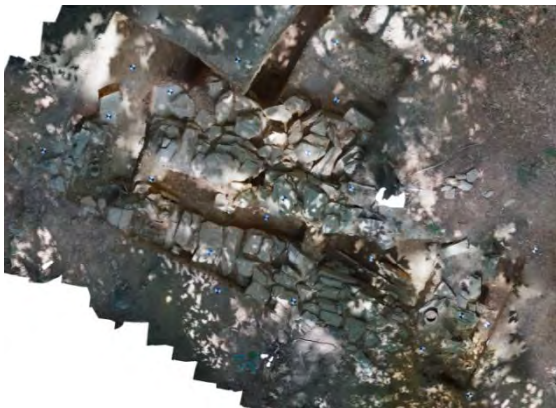


写真1 調査区全景 (オルソン写真)



写真2 石室全景 (南東から)



写真3 鉄製直刀出土状況



写真4 甗・短頸壺出土状況

## 那智山における発掘調査成果について

### — 県指定史跡中世行幸啓御泊所跡確認調査を中心に —

(公財) 和歌山県文化財センター 石丸 彩

#### 1 はじめに

県指定史跡中世行幸啓御泊所跡において、那智大社職員寮の建設が計画された。それに伴い、那智勝浦町を支援する形で令和6年度に確認調査を実施した。

県指定史跡中世行幸啓御泊所跡は、東牟婁郡那智勝浦町那智山に所在する(図1)。調査地は、実方院跡として指定されている場所であり、中世以降の行幸啓の宿泊所として利用されていたとされる。なお、当該地における発掘調査は今回が初めてである。

#### 2 調査の内容

調査は、幅0.8m~3.0m、長さ1.0~4.2mのトレンチを7箇所設定して行い(図2)、基本層序は次の5層に大別した。第0層：現代造成土。第1層：第0層より一段階前の近現代造成土。第2層：近世の遺物包含層あるいは近世の遺構面。第3層：近世の池の基盤層である可能性がある。第4層：中世の遺物包含層あるいは中世の遺構面。

**1 トレンチ** 第0層の直下で第1層がみられた。土層断面の検討の結果、第1層が堆積した時期までは旧地形に沿って東側に大きく下がっていたと考えられる。

第1層の最下層で直径0.2m程度の石を多量に検出したが、これは第1層造成時に土が流出しないよう充填されたものと考えられる。また、第0層、第1層の堆積状況から、調査地が2時期に渡って敷地を東側に拡張していることがわかった(写真1)。

現状地盤面から約0.9mの深さで第4層を検出し、その上面で中世の土坑1基を検出した。

**2 トレンチ** 第0層の直下、現状地盤面から約0.2mの深さで第4層がみられた。その上面で中世の土坑2基及び溝状遺構1条を検出した。トレンチの北端部では、礎石の可能性のある大型の石を検出した(写真2)。

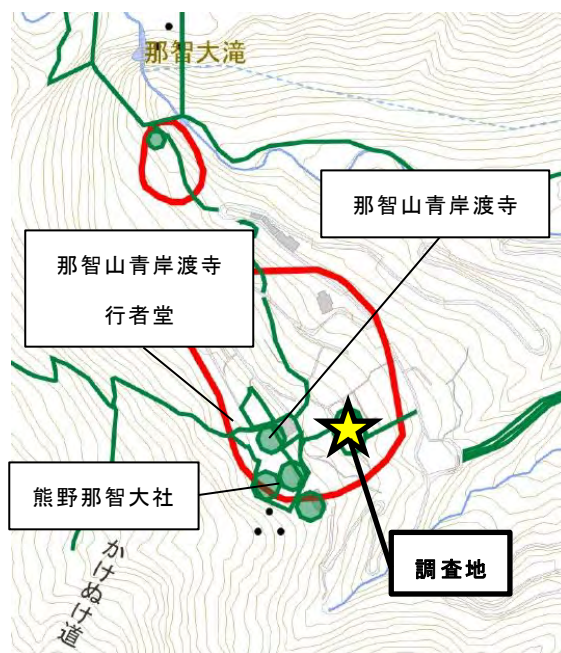


図1 県指定史跡中世行幸啓御泊所跡(実方院)の位置(S=1/10,000)



図2 トレンチ配置図(S=1/400)

3 トレンチ 第0層の直下、現状地盤面から約 0.4m の深さで第4層がみられた。その上面で中世の土坑や溝状遺構を検出した。

4 トレンチ 第0層の直下、現状地盤から約 0.4m の深さで第2層がみられた。その上面で近世の礎石を複数検出した。

5 トレンチ 第0層の直下、現状地盤から約 0.1m の深さで第2・3層がみられた。第3層は近世の遺物包含層であり、締固められていることから、近世の池の基盤層である可能性がある。その上には第2層が堆積しており、近世に埋没したと考えられる。第3層上面では庭石の可能性がある大型の石を複数検出した。

6 トレンチ 第0層の直下、現状地盤から約 0.2m の深さで第2層がみられた。その上面で近世の土坑3基及び礎石の可能性がある石を複数検出した。

7 トレンチ 第0層の直下、現状地盤から約 0.4m の深さで第4層がみられた。その上面で中世の礎石の可能性がある石を複数検出した。



写真1 1トレンチ東壁土層断面及び充填された石 (南西から)



写真2 2トレンチ遺構検出状況 (南東から)

### 3. まとめ

調査の結果、すべてのトレンチにおいて中世から近世の礎石の可能性がある石や土坑等の遺構を検出した。出土遺物は、中世の山茶碗や瓦器、中国製磁器、近世の陶磁器、銭貨、キセル等である。とくに中世の遺物に関しては、日用雑器がほとんどを占めるが、中には高級品とされる中国製磁器も含まれている。この調査状況は、調査地から北西約 200m に位置する場所で令和 4 年度に実施した那智山青岸渡寺の行者堂建設に伴う那智山坊跡確認調査・工事立会調査の結果と同様である (石丸・田之上 2025)。今回初めて実方院で発掘調査したことにより、中近世の建物についての遺構を確認できたことから、那智山の歴史を紐解くうえで重要な発見と言える。

#### 参考文献

和歌山県教育委員会 2023 『和歌山県埋蔵文化財調査年報—令和 4 年度—』

石丸彩・田之上裕子 2025 「那智山坊跡出土遺物(1)・中世編」『和歌山県文化財センター研究紀要』第 3 号 公益財団法人和歌山県文化財センター

公益財団法人和歌山県文化財センター 2025 『公益財団法人和歌山県文化財センター年報 2024』